



事を見せて貰えるように恵まれた私にとって、得難い  
 研究の機会でもあった。(注、全工事の現場監督をお願いしたので  
 した。御柴) 明治になるまで三代に亘って棟梁をつとめて  
 来た私の祖先達が、何らかの關係で手をつけ友であるう  
 仕事跡を見きわめる樂しさを含んで、機会を与えて下  
 さった皆様に、厚くお礼を申しあげたい。

修復の計画は、文化財保存の趣旨から、現状を忠実に  
 修復するために、用材を可能な限り生かして、古い工法  
 を踏襲した工事をするようにとの注意をいただいた。  
 解体以前の外觀からは、小屋組を除いた屋根部の解体  
 ・復元で、極杖など松の赤じんを使ったものが、ある程  
 度残せるものもありそうだと想像していたが、古い建築  
 物の解体修理の常識のように、その腐れのみどさを改め  
 て知らされた。結局、極上全部新材を使い、後述するよ  
 うに出桁・煙掛まで取り替えてなければならぬ状態であ  
 った。

工事にあたって忠実な復元をするために、私は要所要  
 所を記録・撮像・写真などで残すようにつとめてきたが、  
 これは非常に参考になった。写真は約三百五十枚、拓本  
 四十枚、現物資料約四十点等、取りのけて見た。

写真で非常に参考になった一つは、西側の鬼瓦を目安  
 において撮った中に、鳥象の欠損部が写っていた。全体  
 の屋根を眺めて見るだけでは、東も西も変らない造り方  
 だとして見る先入観が、こんな場所での相違を見逃し勝  
 ちになるのに、写真はこれをはっきり示してくれていた。  
 部分写真になつて見ると、その異様に気づいて、鳥象  
 をつけて復元することが正しいという自信がもてた。

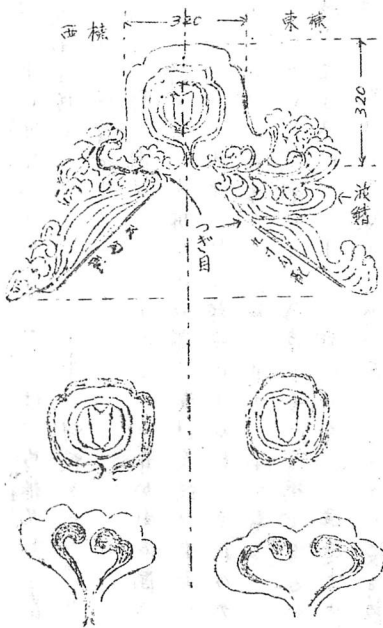
古い写真で鳥象のあるのを見たという、小野菜治氏の  
 話も出ていたが、自分で確かめるものがない限り、自信

を持って仕事にかからせられたい。

鬼瓦の据え方の場合にも、その難点を解決してくれた  
 のは写真であった。鬼瓦の股の開きは、大工の方で破風  
 勾配に合わせ、図柄まで示して左官に渡していたと思わ  
 れる図面も残されているので、その例から見ると、この  
 破風に合った股の開きに合わせ、鬼瓦が焼かれている  
 はずである。

掛瓦をふき、水芭(破風の上の芭瓦)を置き、鳥根丸瓦をふい  
 て、鬼瓦を据える段階になって、鬼瓦の股の勾配がきつ  
 くて、股下の空間がでる。丸瓦を一枚敷くかなど、左  
 官の方で困った話が出てきた時に、この部分の旧状を示  
 す写真が解決を出してくれた。写真を見ると、鳥根丸瓦  
 の上部二枚の下に腰折れが出ていた。これはまずい葺き  
 方であるが、今までそれ程気づかなかった。

多少葺き土と漆喰の厚みが増すが、鳥根丸瓦全部を葺  
 きなおして、股の角度に合うまで瓦を持ちあげて、全体  
 の曲線をなだらかにした葺き方に仕上げることにした。  
 工法は違わないが、前の葺き方よりも無理のない姿にお  
 え、まったと思っている。



(大棟鬼瓦比較図)

東西の鬼瓦を半分づつにして、その相違を  
 比べて見ると

掘本にとつて見ることも意外な発見がある。これも鬼瓦の一例で見たことは、(前頁の)圓末窓東西の鬼瓦に随分違つた面があることに気づいた。

一つは圖に示すように、本体と籍せきになる部分の結合の仕方相異があり、図板は同じ様でも、一方は平面納を彫り出しであるの、一方は立体納な波型の籍せきが彫り出されてる。

掘本を地面に並べて見ると、手ぎわよく図形を処理した技巧と量感の均衡がとれてるのに、實際屋上に据えて見ると弱い。一方は技巧的に進歩の遅れはあつても、屋根全体を引きしめる躍動感にはるかに強い。伝説にすぎないと思われるが、左甚五郎の龍のあら彫りが、精緻な兎うさぎ糸子の龍よりも、高所にあげて見て改めて見直された話のように、技巧よりも経験と意欲で作りがあげていくものの良さを考えさせられた。

この東西の鬼瓦は、檜門修理の年代にも関係をもつていると思われる。鳥袋を取りつける合わせ場所の欠ぎとりの有無、股の開き勾配のちがいが、疑問点も多々あつて、時代のちがうことは確実だと思られる。

解体して見ると、小屋組は非常にしつかりしている。東北の隅木の上にある野隅を除いては、材料の新しさを思わせる程立派である。

しかし、ここにもいろいろ疑点があるが、隅木と小屋束取付けの、東西の違いはどうしても解決がつかない。

瓦をばいで特に心を打たれたのは、破風の構造的な力強さであった。それだけの大きさに少しのゆるみも見せない造り方は、用材も良いし、工法も丁寧、技術もすぐれている。

屋根の姿の品位をきめる場所といつてもよいこの破風

は、上に笠かさ甲かぶ(茅かやや家いえ懸)をうけ、鳥とり根ね瓦わを葺いた上に鬼瓦を据えつける、(工官工事の呼吸とピツリ合つた造り方が必要である。

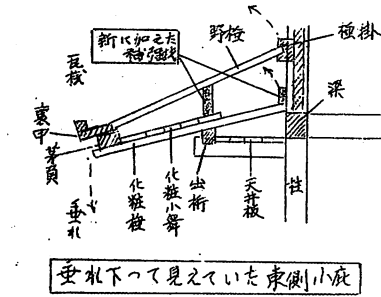
下したの棟、高棟、荷にあんここの葺かれる隅の反りを受けた締めと、大棟の両股鬼瓦受けた縁のゆるい反りなどの姿を作り出す大切な部分になるが、それらの重珠と優しさを加える要に、破風、笠甲の姿がある。

いろいろ問題になる構造をもつ波檜であるが、この姿特に瓦をばいでしまった時にみだりにこの構造上の美しさには、圧倒される感であつた。今はその姿を蔭らひそめてしめていけるが、磐石の力で支えているといつてよい。

解体前白蟻の害だけと思つていたたき極きの垂れは、勿論白蟻の害のひどさもあつたが、それ以外に構造上の問題があつた。腐れのため極先がたわんで見えていたのは、実は化粧極の根元の釘がはずれ、野極は極先を引離した結果であることがわかつた。(左図参照、点線矢印方向へ)

旧法を守るといつても、明らかに構造上の欠陥である以上、この部分には新たな補強を考へなければならぬ。

化粧極の方は、その壁つきが



梁に直接釘付けのため、釘のさいてる新しい間は、受けがしつかりきいてるのでよく止まつていたが、昔の釘は手打ちで、極の成六・八センチのものに十二センチの釘で止めてあつた。本末釘は止める材料の厚さの二倍半はほしいところ、しかも角錐形の手打釘である。一度ゆるみかるとぬけやすくなる。

釘の抜ける方向に對して、直角に押えになる材料を補強するものと、更に下に支えのない柱の先端部に加わる力が、柱の中間の桁の上端で中斷されて、先端の加圧を減じさせる方法をとった。(前掲参照)

尚、解体して驚いたことは、南側腰屋根の出桁の上部をはいで見ると、釘が全然きかない程白蟻が食い荒らして、空洞になつてしまつてゐることである。さらにそれは、野檜をかける柱掛、尚その上部に続く格子窓の敷居までに及んでゐた。尤もなくその部分は全部取り替へることにした。

大屋根・腰屋根ともに北側よりも南側がひどかつたが、この原因は、材料・工法も關係すると思ふが、地盤沈下と窓が作られて、湿気が屋根下にしみる可能性が多かつたためではないかと思ふ。

窓には内外二か所に敷居を取付けられてゐるが、外の敷居は一本溝ではめ込みの油障子かと思われる。これは操作の不便のためか、耐久性の欠陥のためか長らく使われていないようであつた。

内側には両引きになつた一本溝の両戸が作られてゐるが、柱の内側に取りつけてあるために、この両戸敷居の際き門から、雨の湿害を受けやすい構造になつてゐた。

これは南北の窓とも同様であるが、南側は二開、北側は一開で、この広さの異なる点が、南側が屋根下まで侵される率が高くなつたと思つてゐる。

北側の窓下の被害も、同じ箇所窓下土壁がくずれ落ちてゐるが、折れまでは及んでゐない。風雨の吹きつける方向による原因も影響してゐることと考えた。

窓の部分については、操作の不便もあつても、現状以前にあつたと思われ一本溝に、硝子障子をはめ込むこ

とにした。高水會長の案によつて、採光と内部及び屋根裏にひびく湿害を、少しでも喰いとめるてたてである。結果は良好だと思つてゐる。特に内部からの感じが良くなつた。将来の用途を考えると、一層効果があると思われる。

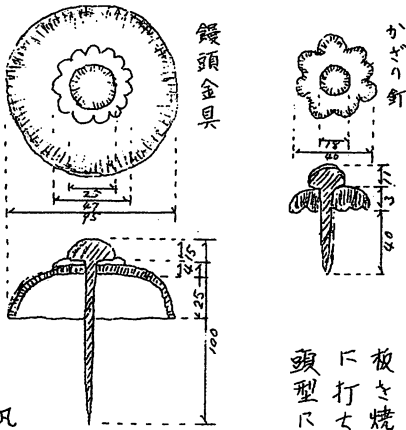
この地方の暴風雨の場合、東北の風を特に警戒するが、東北隅は瓦の損傷が最もひどかつた。

たゞ懸念の場合、東よりも西の方がいたみかひどい。材料だけの問題でもあるまい。

地盤沈下についてはそれほどはげしいものではないが、檜台(西側の積石)に向つて流れ込む上の広場の地盤傾斜が、内部の上を流し出し、抜け石もずれの出てゐる石が、処々に見られることも一因である。尚上の広場に溢れた水が、檜門の下に集つて流れる構造も影響して、石の間の即地をこわし、石が沈んでゐるのを見て、水の流れる方向を考えなければならぬと思つた。そのため柱の下りの均衡が破れ、西側の柱は、根元の腐れとともに下りが最もひどい。このために前部の大きな敷桁が折れ下つてゐる。材料が後部より小きいので、途中で銕いであつたことは、このひずみを一層顕著にしたようである。

屋根を全部下した時に、ジャツキでもちあげて修正したが、柱の沈下の響きは、大屋根の出桁(せいがい桁)を二か所で渡うたせ、西南隅の壁のずれ下り四センチ程で、柱上に詰木を施した応急処置をとつてあつた。これらの場所は、柱一本持ちあげて簡単に変わる程度のものではないが、ひずみを軽少にして、夫々の場所には、別々に適宜な方法をとることにした。

( 櫓 門 扉 金 具 )



鍔頭金具

かざり釘

全体が出来上ってくると、小さい疵がいろいろ目立つてくる。門の扉の鍔板の修理、鍔頭金具や飾り釘など、些細な材料であるが、手打ちで一つ宛作るとなると、大変なことである。一枚の鉄板を焼いて、さめないうちちに打ちくばめて、堂々の鍔頭型に造りあげることば、今どきの職人ではなかなかひきうけてくれる人がない。飾り釘も座金をつけて丸頭をつけた釘を、五十本も作るというた仕事は、凡そ難儀なことである。なくては気にとめない

修復材料については、充分吟味をして選材してもらった。松は赤じんを、檜・裏甲等は杉の赤膚をーと言ったように、申し分のない材料を使った。旧工法上必要な杉皮等も、着工時期が秋、伐採皮の適期を過ぎていて、具内で入手困難のため、はるばる名古屋からトラック輸送させるなど、こうした文化財の修復にはなかなか難点が多い。

丸瓦の敷漆喰(昔き土の上に着いた丸瓦を又はがして漆喰を瓦下全面につける)や、瓦の接合箇所巻いていく漆喰作業も旧法をとり、消石灰・かき灰・海藻・麻芋・切・いわし油を混合して、手搦きにしたものを使った。搦くのも数度くりかえされるので、連続頻繁な使用によって、石臼もとうとう底をつき抜いてしまった。

人達が沢山いるのだが、放置されないポイントである。手直しをしたい場所はいくらでもあるが、屋根を主体にして最小限度にとどめなければならなかった。

こうして古建築の修復に、地方ではもうこれを任せられる人が少なくなった。幸い曾宮棟梁という、堂宮建築に長年の経験をもたれた人を得て、完成することができたことは喜ばしい。

働いてくれた大工も左官も、棟梁が自慢するほどあって、腕きき揃いであった。地方では機会少ないこの仕事に、誇りをもって立ち向ってくれた。眉をひそめる仕事振りの多い近頃の世情の中に、仕事そのものを楽しんでからの仕事振りは、昔この櫓を造りあげた人達の、各所に残してくれた良さは素晴らしい仕事振りにも似ているように思う。

今、完成された櫓門をじっくりと見つめて、私は去り難い気持ちである。この後おそらく五十年は立派に生き抜くであろうこの櫓門が、風雪に耐えて次第になれていく美しさを、期待しながら見守っていききたい。

この三の丸櫓門については、要調査、新たな疑問点など、解決しなければならぬ点が多々あるが、その解明の樂しみを後に残して筆をおくことにする。

修復記録としては、別に保存会の方に写真を添えて残すことにしたので、気づいた二三を書き綴って、私のお礼としたい。

(昭和五〇年五月八日)

(余白)

櫓門修築工事費	積算高
櫓門本休修築費	三七二,〇〇〇円
同 付帯工事費	二三四,四七〇円
機式及び夜間費	二一九,〇八〇円
記念品料夜間費	一四〇,〇〇〇円
合計 四三三,五五〇円	

(事務局)